



設楽 馨 著

# 「NHK バラエティ番組に見る文字テロップの変遷 ～テレビにおける表記実態と機能の分化～」

〔武庫川女子大学紀要人文・社会科学編〕第59巻(2012)所収

メディア研究部 原 由美子

NHKアーカイブス学術利用トライアル研究から生まれた成果論文を紹介するこのコラムでは、7月号ではドラマ、9月号、11月号ではドキュメンタリー番組を研究対象とした論文を紹介してきた。今回紹介するのは、これまでとは異なり、バラエティ番組、しかも番組内容そのものではなく、そこに付された「文字テロップ」を研究対象とするものである。

近年、多くの番組に「文字テロップ」が付されることが常態化しているだけでなく、画面の上下、左右に、それぞれ異なる付加情報が加えられる場合さえ見られる。いつごろから、なぜ、このような状況を呈するようになったのか。

著者は、こうした文字情報の変化が、文字情報を表記するための道具の変化とテレビを取り巻く社会状況の変化に起因するとの仮説を立て、テレビ誕生当時の番組にまでさかのぼって分析を行った。

著者は、標記論文のほかに、『「紅白歌合戦」に見る30年間の文字テロップ～1960年代から1980年代まで～』〔武庫川女子大学言語文化研究所年報第21号〕(2009)、『NHKクイズ番組に見る文字情報の変遷』〔言語と交流第14号〕(2011)の2本の論文を発表している。そこでは「紅白歌合戦」と「クイズ番組」を対象に、そ

れぞれにおける文字テロップの変遷を分析したが、本論文では、これらの「個別的な番組傾向に関わらない、バラエティ番組全般における文字情報の変遷とその要因」を分析したいとして、1965年から5年ごとにその年代の代表的なバラエティ番組を選定し、計29タイトル79本を分析対象としている。

具体的には、1960年代「夢であいましょう」「私の秘密」「歌のグランドショー」など、1970年代「思い出のメロディー」「ステージ101」「ゲーム ホントにホント?」「クイズ面白ゼミナール」など、1980年代「お笑いオンステージ」「ばらえていテレビファソラシド」「連想ゲーム」など、1990年代「クイズ 日本人の質問」「コメディお江戸でござる」など、2000年代「鶴瓶の家族に乾杯」「あなたも挑戦! ことばゲーム」「きよしこの夜」などである。

文字情報については、番組のセットや小道具、パターンなどに文字が付されている場合と、文字テロップとして画面上に付加された場合の両方を分析対象とし、表示時間、情報内容、画面上の位置や分量、文字デザイン等を書き起こしてデータとしている。

これによって、量的には、60年代以降確実に増加していること、増加のポイントは、1980年

代と2000年代にそれぞれあったことを明らかにした。多くの人が印象として感じていたことかもしれないが、それを数値的に実証し得たことは、アーカイブ利用研究ならではの成果である。

また、質的な内容変化として、それぞれの年代ごとの特徴を次のようにまとめている。

#### 1) 文字テロップ以前(1960年代)

文字情報のほぼすべてが、美術小物や舞台セット上に表記されており、文字テロップとしては、歌の題目や作詞作曲者名、歌手名、クイズ番組の回答などが手書きテロップで表示される程度であった。

#### 2) 文字テロップの詳細化(1970年代)

美術小物や舞台セット上の文字情報に加え、文字テロップによる情報が増えてくる。出演者など番組の基本的な構成を明示するだけでなく、クイズの出題者や歌の歌詞など文字情報が詳細化していった。

#### 3) 文字テロップによる演出効果(1980年代)

これまでに比べ、対象となるバラエティー番組そのものの数が増えてくる。番組も多様化し、独自の演出が加えられるようになる。それに応じて、コンテンツに応じた多彩なテロップ・クイズの得点や歌詞の翻訳などが見られ始める。

#### 4) 文字テロップによる画像デコレーション(1990年代)

文字発生装置が導入されたことで、高いデザイン性や凝った装飾が可能になる。文字テロップはフォントや文字色、背景色などが多彩になり、表記内容に即したデザインが選択されるようになる。

#### 5) 文字テロップによる臨場感(2000年代)

これまでにはなかった「文字テロップによる状況説明」が登場する。経過や発言を写しとった表記内容が加わり、ごく短い字数の文字テロップが頻出して出現回数が激増した。コン

テンツによっては、画面上の文字情報が常態化するものも現れ、「今、この場で何が起きているか」という臨場感を示すものとなる。

こうした文字情報の量的、質的变化を通じて、文字情報の機能の変化が読み取れたという。すなわち、題目や出演者など単純な構成明示の機能から、表記内容の詳細化、そして番組の個性に応じた表記内容が発生し、装飾性が高まり、演出効果を担う機能が付加されていく。さらに、「今、この場で、何が」という臨場感を視聴者に伝達する機能を備え、視聴者のテレビ視聴行為を促し関心を惹起する「フック」としての機能も持つようになった、とまとめている。

変化の要因として著者は、文字テロップ発生装置の登場、進化を第一に挙げている。同時に、受信側の状況変化、すなわち「ながら視聴」が増加したことによって、視聴のきっかけとなる「フック」機能として文字テロップが頻繁に使われるようになったとする。

評者(原)は、2000年当時放送されていたバラエティー番組(民放も含め100本以上)を内容分析した経験がある<sup>注)</sup>。そのなかで、文字テロップ(字幕)が、注目点の強調や発言への反応、番組の進行など、番組演出上の重要な要素となっていることを見出した。文字テロップの機能変化や量的増加の要因として、機器の進化や「フック」機能の必要性だけでなく、演出要素としての存在感や重要度の変化があったと考える。文字テロップは、NHKより民放の番組で多用される傾向がある。放送ライブラリー等を利用して民放番組の検証も行われれば、さらに興味深い知見が得られるのではないだろうか。

(はら ゆみこ)

注: 友宗・原・重森「日常感覚に寄り添うバラエティー番組～番組内容分析による一考察～」『放送研究と調査』2001年3月号